

サステイナブルな観光の見方を変える。

「マルチスピーシーズ」の視点から、人間と人間以外の種が共に生きるサステイナブルな観光を考える。

大自然の中の希少動物の観察が中心だったワイルドライフ・ツーリズムに、近年、その枠に収まらない多様化が起こっています。その1つが、SNSの影響で大勢の観光客が野良のウサギやネコなどを見に押し寄せる現象です。本研究は、人々が動物に向けるまなざしの変化を分析し、さらに、人間と人間以外の種の相互関係を重視するマルチスピーシーズというアプローチからも、サステイナブルな観光の可能性について考えます。

研究代表者

笛吹理絵

USUI Rie



立命館アジア太平洋大学
サステイナビリティ観光学部 准教授

「もし、動物も観光管理の議論に参加したら何を訴えるだろう？」その答えに一步でも近づけるよう研究を進めています」

新規性・独自性 | 学際的なバックグラウンドから、新しい視座で観光研究に取り組む。

本研究の独自性は、研究代表者の人類学、生態学、民族霊長類学、地理学にわたるバックグラウンドと、いくつもの分野をまたぎながら、多角的な視点で研究を進めて来たことに根ざしています。そうした学際性を背景に、現在は「マルチスピーシーズ」の視座から、サステイナブルな観光のあり方を考える研究を進めています。マルチスピーシーズとは、人間中心の視点を超え、人間とさまざまな生きものが互いに影響を与えながら世界を形づくっているという考え方で、

複数の生物種との共生を考えるものです。

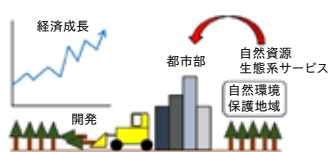
また Convivial Conservation (共生型保全) の概念が、人間と人間以外の種の共存を促進する方法となり得るかについても可能性を探っています。Convivial Conservation の考え方の一つとして、日常生活の中で身近な自然を尊重し、自然との共存を図ることが挙げられます。この概念の応用可能性について、大分県佐伯市で実施されているムササビ観察ツアーなどを事例に取り上げ、調査を進めています。



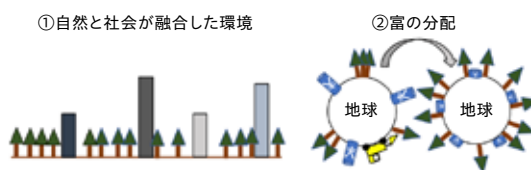
人と動物と観光の関係は多様化している。大分県佐伯市のムササビウォッチングなどは、“身近な自然や生物種との共存を図る観光”という可能性を持つ。一方では、SNSをきっかけに人々が野良ウサギを見に殺到する広島県大久野島のような“観光客が主導して作り出したワイルドライフ・ツーリズム”もある（写真）。

共生型保全のイメージ図（左は資本主義的な自然環境保全の仕組み）

資本主義的な自然環境保全



共生型保全のイメージ



出典：研究代表者 作成

社会連携に向けて | 観光教育にも新たな視点を導入する。

本研究の社会連携では、まず、教育領域での活動が考えられます。マルチスピーシーズの視点を、観光の研究のアプローチだけではなく、大学や観光の現場でも取り入れることで、社会に貢献しながら研究を進めていける可能性が生まれます。動物や自然と観光の持続的発展には倫理面も含めた教育が重要です。そこでAPUの教育学者との共同研究で、ゲームを用いた体験型学習など効果的な手法を開発していま

す。これを観光地での来訪者向け教育に生かせば、動物福祉や環境保全への理解を深め、持続可能な観光の実現に貢献できるでしょう。今後はツアー主催団体や自治体との連携も模索していきます。

また、国際的な視点では、従来、欧米中心だったワイルドライフツーリズム研究に、日本やアジアの視点を取り入れた発信を行うことで、国際的な研究に寄与することも目指しています。

